酒田港開港五百年記念

〔第72回企画展示〕

第4回市民コレクション展

酒田竿と釣り師

2階・酒田の歴史と民俗資料展

―酒田港古水戸口での魚釣り―

開催期間　平成4年10月1日(木)～11月29日(日)

開館時間　午前9時～午後4時30分

休 館 日　10月無休・11月月曜日
（月曜日が祝日のときは翌日）

入 館 料　おとな100円・児童生徒50円
65歳以上の方と身体障害者の
方は無料です。

酒田市立資料館

酒田市一番町8-16　TEL(0234)24-6544

昭和10年頃の新井田川風景

【プロローグ】　人はなぜ釣りをするのだろうか。

酒田には、海と川と空と、そして魚たちの遊ぶ世界がいつも身近にありました。古くは食料獲得の手段としてあるいは、子供の遊びとか、暇のある人たちの隠居道楽として、それぞれに魚と向き合って暮らしてきました。中には「釣りは道楽の行き止まり・釣りする馬鹿に見る阿呆」と江戸川柳によまれたように、「釣迷一釣きちがい」といわれる愛好者も多く出現しました。一方、庄内酒井藩のように尚武奨励の方策として、また、太公望故事にみる「人と魚とを兼忘れる」など、人は求めるものは違っていても、つまりは、ウォルトンが釣りのバイブル『釣魚大全』の副題に「静思を愛する人のレクリェーション」と付したように、釣りは人生の重要な遊びのひとつであったのです。そして「その気分は、深い研究心と対象にたいする執念と努力と忍耐のはてに、わたしたちに訪れる楽しさ」にありました。

今回は、酒田港開港五百年記念展の第二弾として「海と川」をテーマにして、市民参加のコレクション展を開催しました。「庶民の釣りの世界」の中で生まれ、実用から一級の工芸品へと育てあげていった酒田竿と釣り師たちは、「釣りとは何か」と、もう一度現代人への大事な問いかけをしてくれることでしょう。

開催にあたっては、根上吾郎氏のコレクションをはじめ多くの方々からご協力をいただきました。厚くお礼を申し上げます。

【解　説】酒　田　竿

糸と針で、水中の魚をとることを釣りというならば、魚をいざなう餌と、針糸と関連させる竿は不可欠の要件ではない。でも、昔から日本では、「六物一つそなわざれば、魚うべからず。」ということばがある。六物とは竿、糸、浮(うき)、沈（しずみ)、針(鉤)、餌である。

かって、江戸時代庄内藩では、釣果は藩士の面目にかかわる「勝負」であった。その勝負を左右する釣竿の善し悪しは、士族たちにとっては、名刀や名馬を手にいれるようなものであった。庄内竿と称される名竿はこうした風土の中で、誇り高き士族たちの手によって、選びぬかれ、磨き上げられ、創りだされていったのである。名竿を手にすると、長短・硬軟の調子の違いはあっても、庄内竿独特のいい知れぬ気品の高さに魅せられる。士族たちはこの竿で、見えざる魚との闘いに臨み、武芸のひとつとして、修業のようなつもりで釣りをしたのである。

ざっこしめ(雑魚捕り)昭和初期

これに対して身近に海あり、川ありで、幼児の時から雑魚と馴れ親しんできた庶民にとっての釣りは、これらと趣を異にする「ふだん着の釣り」であり、遊びと実用が優先されていくのも自然の理であったろう。こうした浜町的な風土の中にも、「鵜渡川原竿」や「新堀竿」を先駆けとしてほとんど期を一にして、優れた庄内竿の伝統技法が受け継がれ、酒田にも多くの竿匠を輩出した。そして、やがて鶴岡にはない酒田だけの竿、すなわち酒田竿の名竿が、つぎつぎと生まれていった。

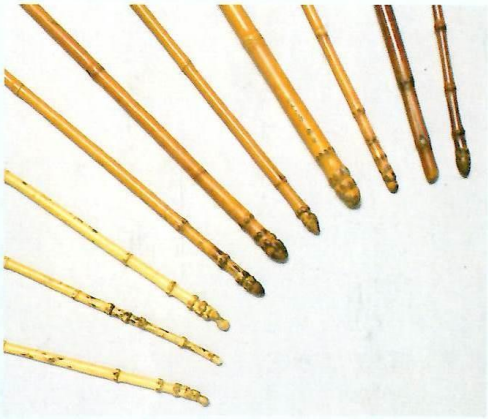
その第一はなんといっても、「ホテイ竿」である。

庄内竿にはニガ竹のほかは、矢竹や大名竹が約10%あるが、ホテイ竹のものは１本もないという。しかし、酒田周辺の釣り人たちは、好んでホテイ竹の竿を作った。竹質が堅くて、ニガ竹よりは繊細なウラがついているホテイ竹は、最も優れた釣り竿の素材であった。ことに小物釣り用として、絶妙な感触を楽しむことができ、愛用されていた。

作り方は庄内竿とまったく同じで、天然のホテイ竹の根(ネッコ)から穂先まで、なんの加工もすることなく、そのまま一直線にタメた延竿(ノベサオ)である。その素朴で、優雅な一本の釣竿には、庄内竿の伝統工芸の美とともに、確かさと素直さに満ちた健康な美しさが凝縮されている。

二つ目は、「カラ竹の長竿」である。

港南突堤の当才二才のセイゴは、車竿(投げ竿)よりも小さな浮(うき)を流す長竿が釣りやすかったのである。重いニガ竹の長竿を振り回すより、軽くて扱いやすいカラ竹の竿が作られたのである。



酒　田　竿

三つ目は、車竿という酒田独特の遠投用の投げ竿である。これも伝統を固持する鶴岡衆は、使用しなかったものである。

このように酒田竿は、庄内竿の優れた技法を継承しながら、その土地の釣魚事情に見事に適合させていったのである。そして単に「使用される」という即物的な用だけでなく、自然と人間との協力によって生まれ出る一竿に、心を高め、清め、慰め、楽しませる「用」も見逃してはならない。とはいえ、釣具の近代化は、これらの効用をすっかり置き去りにして、釣技・釣法にも革命的変革をもたらしている。

南防波堤でのつり風景(昭和40年代)